善意の音色響く

グランドピアノを囲み、支援に感謝する高田小の児童＝陸前高田市

高田小
弾むピアノ 児童に元気
茨城の女性

陸前高田市の高田小（木下邦男校長、児童330人）に15日、茨城県龍ケ崎市の岩堀隆子さん(72)から、グランドピアノが届いた。津波で体育館が浸水し、ピアノも被害を受けたため、教職員と児童は心温まる支援に胸を弾ませている。

早速、教員が届いたピアノを奏で、美しい音色に児童が歓声を上げた。

ピアノは、岩堀さんが自宅で教室を開いていた際に使っていた。震災の惨状を知って支援を思い立ち、本県出身の知人を通して、同校へ送った。岩堀さんは「子どもたちが少しでも元気になり、未来に希望が持てるようになってほしい」と願った。

高田小体育館にあったアップライトピアノは津波で浸水し、使えない状態だった。体育館での集会は、ラジカセを使い合唱を行っていた。平芳則副校長は「子どもたちがとても喜んでいる。心温まる支援に感謝したい」と語った。

山田町
首都圏学校 中心に協力
東京・NPO法人

本県を含む東北地方で吹奏楽部の顧問などを務めた演奏家が立ち上げたプロジェクト「ウインドバンド・フォー・グリーン」は15日、山田町にクラリネットなど楽器約30点を寄贈した。

プロジェクトは、東京都のNPO法人ポイントグリーン推進環境会議が運営。東日本大震災で失われた楽器を被災地に送ろうと全国に呼び掛け、首都圏の学校を中心に多くの寄付が寄せられた。

プロジェクト発起人の一人、尚美ミュージックカレッジ専門学校（東京都）の安西裕司講師らが同町織笠の山田中を訪れ、クラリネットやトランペットなどの楽器を届けた。

寄贈された楽器を手に取り笑顔を見せる山田中の生徒＝山田町

同校吹奏楽部は楽器の流失はなかったが、保護者の負担を考えると楽器の新規購入は難しい。そんな中で届いた善意に、部員は楽器を手に取って大喜びした。

寄贈された楽器は今後、同校や被災した町内のアマチュア楽団に配分。9月末には、これらの楽器を使ったコンサートの計画もある。

安西講師と親交があり、プロジェクトの橋渡し役を務めた町教委の箱山智美指導主事は「演奏して心を通わせるのが音楽。頂いた楽器で町の気持ちを高めたい」と喜んだ。

各地に楽器寄贈

高田高
ネット活用 吹奏楽部に
東京の奏者

「今度は一緒に合奏しよう」。インターネットを通じて集めた楽器を高田高に寄贈する武田和大さん（右）＝大船渡市

サクソホン奏者の武田和大さん（東京都）らは15日、震災で大きな被害を受けた陸前高田市の高田高吹奏楽部にインターネットを通じて集めた楽器を届けた。被災地の子どもたちに楽器を届けるプロジェクト「楽器ｆｏｒＫｉｄｓ」の取り組み。中心メンバーの武田さんは「たとえ被災地でも音楽をやりたくなるのは当然。これからも応援を続けたい」と継続支援に思いを込める。

武田さんらプロジェクトのメンバー5人が、同校が仮校舎として使用している大船渡東高市立根町の大船渡東高萱中校舎を訪問。フルートやテナーサクソホン、チューバなどを部室に運ぶと、部員たちは待ちかねたように手に取った。

楽器はインターネットを通じて「使わなくなった楽器を被災地に届けよう」との呼び掛けに応えて集まった。武田さんらは「気持ちが形になったもの。直接手渡しで届けたい」と修理、調整した上で同日から被災地への訪問を始めた。

吹奏楽部は、7月のコンクールに向け練習中。顧問の小笠原祐子教諭は「皆さんのおかげで一通りの楽器がそろった。大会でいい演奏ができるように頑張りたい」と善意の結集に感謝する。

釜石市の釜石東中吹奏楽部にも同日、楽器が届けられた。

被災地から

山田 復興イベント盛況

盛岡市のボランティアや東京都のミュージシャンらが企画した復興イベント「ＩＬＯＶＥ やまだ」（実行委主催）は15日、山田町八幡町の御蔵山で開かれ、流しそうめんや音楽ライブなどでにぎわった。

屋内のテント会場では全国から寄せられた夏物衣料や茶わん、漫画本などを無料で配布。「ちょこっと食堂」と名付けたスペースでは、中華丼とフランクフルトも提供された。

ミュージシャンによるライブも繰り広げられたほか、屋外では流しそうめんも振る舞われた。

山田南小6年の沢田拓真君は「流しそうめんは楽しいから、いっぱい食べられそう」と、夏の味に満足げだった。

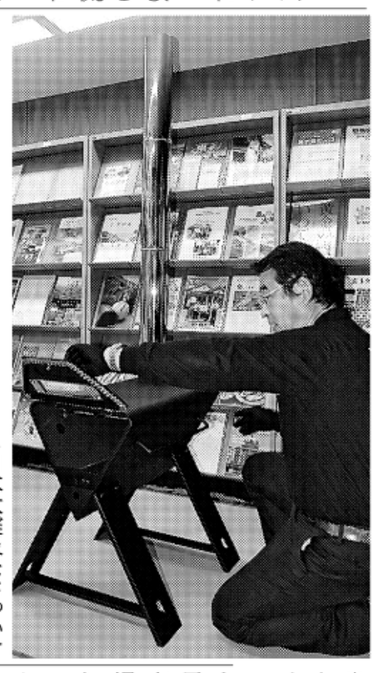
屋外で流しそうめんを楽しむ来場者＝山田町

満足 流しそうめん

まきストーブ役立てて
宮古市に屋外用40台
京都の企業

京都市を中心にまき ニアリングは15日、東日本大震災をきっかけに開発した屋外用のまきストーブ40台を宮古市に寄贈した。

代表取締役の川上孝司さん(59)らが市役所を訪れ、山口公正副市長に目録を手渡した。


宮古市に40台寄贈されたスチール製のまきストーブ

〜〜〜〜〜〜〜〜

まきストーブはスチール製で屋外調理用。被災者支援に役立てたいと同社が震災直後から試作を重ね、6月上旬に完成した。完全燃焼時はほとんど煙が出ない構造といい、宮古市は漁業者の屋外作業場などでの活用を想定している。

まきストーブはスチール製で屋外調理用。被災者支援に役立てたいと同社が震災直後から試作を重ね、6月上旬に完成した。完全燃焼時はほとんど煙が出ない構造といい、宮古市は漁業者の屋外作業場などでの活用を想定している。

宮古復興願い 3千万円送る
全国信金協会

全国信用金庫協会（大前孝治会長）は15日、被災地の復興を願い、全国271の信金や関係団体の役職員約12万人から寄せられた見舞金3千万円を宮古市に送った。

山口公正副市長に目録を手渡す小野薩会長（左）＝宮古市

東北地区信金協会長の小野薩青い森信金理事長、県信金協会会長の及川富美人水沢信金理事長、宮古信金の斎藤浩司理事長らが市役所を訪問した。

小野会長が「復興資金として有効に使ってください」と述べ、山口公正副市長に目録を手渡した。

全国信金協会は「東日本大震災2千円募金」として関係者に呼び掛け、目標額を上回る3億7340万円が集まった。

本県、宮城、福島の被災3県の35市町村などに送り、同日は久慈市にも210万円送った。

空手の継続へ 山田に義援金
国際松濤館連盟

岩泉町小本出身の金沢弘和さん(80)が館長を務める国際松濤館空手道連盟（本部東京都）は15日、山田町に世界各国の道場生から寄せられた義援金20万円を送った。

金沢館長らが町役場を訪問し、佐藤勝一副町長に目録を手渡した。今回の津波で犠牲になった同町の伊藤四郎前同連盟県本部長宅も訪ね、町内の道場生に見舞金と津波で流失した見舞金と津波で流失

佐藤勝一副町長に義援金の目録を手渡す金沢弘和館長（右から2人目）＝山田町

〜〜〜〜〜〜〜〜

したためけいこ着を寄贈した。

同連盟は、世界130カ国近くに支部を持ち、国内外から多くの義援金が寄せられた。

金沢館長は「今後も空手を続けたい人には継続的に援助していきたい」と、古里の後輩にエールを送った。

津波で流失→発見
奇跡の石碑に大漁祈る
宮古

宮古市赤前に明治、昭和そして今回の大津波をくぐり抜けた石碑がある。一時流失していたが、奇跡的に見つかった。発見した津軽石磯建網組合（山根幸伸組合長）の組合員は15日、石碑を「一時避難」させている同市赤前の山根組合長の自宅で大漁、安全を祈願し、漁業復興への思いを新たにした。

この石碑は、漁の神様のえびす神を祭る「小湊塔の石碑」。刻まれた年代から1869（明治2）年に建立されたとみられる。

震災前は赤前地区の大須賀海岸堤防のすぐ陸側にあった御前堂社境内に置かれていた。

50年以上、御前堂社を信仰してきた同組合の捜索により5月1日、同社から約30メートル先の倒木やがれきに覆われた泥の中から約10センチ頭を出しているところを発見された。

山根組合長は「宮古湾の漁を見続けてきた石碑。あの津波の後で見つけることができたのは奇跡的で漁を続けなさいということだろうか。また豊かな海に戻るよう見守り続けてほしい」と漁業再興に思いをはせる。

津波に流されたが、無事見つかった「小湊塔の石碑」（中央）と津軽石磯建網組合の組合員ら＝宮古市赤前

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。